



大崎でこんな活動をしています！

NPO 法人おおさき地域創造研究会
事務局長（せん杜理事） 小玉 順子

移住支援センターの相談は、ある日突然「全方位」からやってきます。相談窓口に座る担当者は、丁寧な聞き取りをおこない、相談者のニーズを整理していきます。

大崎市に移住したいというのはノーマルな相談なほうで、空き家になってしまった家をどうしたらよいか、農業（果樹園）を継いでくれる人を探してほしい、鳴子温泉のお湯が肌に合うので職と住まいを探してほしい等とオーダーメイドな対応が求められます。

ある時は首都圏から、ある時は雪の多い新庄や弘前からと、未来の夢を叶えようと移住する人、今の課題を何とかしたいと移住する人、いずれも人生の決断に立ち会う仕事です。

大崎は比較的選んでいただきやすい環境のようで、大崎市から受託した5年間で931人を受け入れています。人口は、合併した12年前の13万9千人から、現在12万7千人になっていることをみると、この931人を多いか少ないかという議論はありますが、確実に人口は減っているのです。

この地域で市民活動を行って25年近くになります。この道に入ったきっかけは子ども劇場でした。親子で舞台を見に行く楽しさから、運営側の仕事に携わっているあたりにNPOとの出会いがありました。その後私は、特に地域コミュニティに関心があり現在の組織を立ち上げ、関わり続けています。

市民活動の魅力は？と聞かれたら「人間臭いところ」でしょうか。地域には話し合いの場をつくるために入っていくことが多いのですが、そこで気づくのは、本音が出始め人柄が出るころから対話が深まっていくということ。ここから地域づくりがはじまります。

実はこの体験のあと、会議が終わっても自己ワークショップが続いていきます。2度目の会議の

前に「前回の会議から何か変化はありましたか」と尋ねてみると、「自分の住むまちの空気が柔らかく感じた」「道端にこんなにきれいな花が咲いていたことに気づいた」という声が返ってきました。

「対話」とはよく言ったものです。相手がいて話すから返ってくる、それを繰り返すことが響き合い、前向きな参加をしているグループほど、良いアイデアが響き合いのうちに増えてくるものなのです。こういう場面に出会うと、この地域はまだ続いていく。と、いう直観と共に心も温まります。このコロナ禍ではそこまでの対話ができないのが残念です。

先日、霜が降りる前に「畑じまい」を手伝ってほしいと市内にある復興公営住宅の方に声掛けしたところ8名の参加を得ました。自己紹介で「土に触りたくて来ました」「さつまいも掘りにほだされて」とさまざま、その人にとっての日常の場所からちょっと離れるところがあること、土と戯れることで感覚を呼び覚ますことが、人には不可欠なことなのだなあと感じさせられた1日でした。震災から10年になろうとしています。「DAN DANふるさとプロジェクト」に参加していたお父さんお母さん方も伴侶を亡くされたり、階段の上り下りがきつい身体状況、大崎をふるさとと呼んでいただけるようにサポートしていきますね。

ここまで走ってきた私ですが、NPOの魂を入れ込んできた事業とこれまで培ったネットワークとともに、若い世代に任せしていく作業を「楽しみ」として過ごしてまいりたいと思います。

